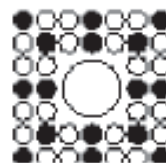


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter



No.35

May, 2019

● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

(詳しくは、本ニューズレター7 ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
 - ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
 - ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
- 同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
 - ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
 - ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
- 同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします!

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行ってまいりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>
- ◆ メールの方は: ishiikayoko@hotmail.com

2018 年 BCJA 年活動状況について



BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA2018 年度の活動について、ご報告させていただきます。

18 年目を迎えた BCJA 奨学金については、例年並みの応募者数の中から、選考委員会により有数な 5 名が選ばれ、英国留学に送り出すことができました。残念ながら奨学金への寄付総額は、徐々に減少する傾向にあり、BCJA 奨学金制度を維持するためには、BCJA 会員登録数の増加、および BCJA 役員数の増加など、地道に取り組む必要があります。幸い BCJA 奨学生独自の OB 組織について、順調に発展しており、定期的会合が英国留学者交流会として開かれております。昨年は、BCJA のメンバーにも声掛けして、11 月 9 日に東京、神田で盛大に開催され、大いに盛り上がりました。

今後は、役員会、奨学金が BCJA 奨学生 OB を主体とした運営に徐々に移行していくことを願っております。今後とも、引き続きご支援をよろしく願いいたします。

(BCJA 年間活動についてのお問い合わせは、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

2018 年度BCJA英国留学奨学金の審査を終えて

——募金へのご協力に対する感謝とお願い

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

- ◆ 寄付金額： 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号： 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名： BCJA 奨学基金

今年もまた、別表の通り、BCJA会員の皆様の貴重なご支援により、5人の非常に優秀な方々にBCJA英国留学奨学金を差し上げることが出来ました。ご支援をいただきました会員の皆様、お忙しい中を審査にご協力いただきました先生方に、心からお礼を申し上げます。

本年度の応募者は、昨年の56名から17名増えて、73名でした。応募者の学問分野は、授与者リストからもお分かりいただけますように、人文科学、社会科学、自然科学、工学、医学、芸術、スポーツと、ほとんどすべての分野にわたっています。音楽・美術等芸術の分野と、物理・化学等自然科学系の方々が、少しずつですが着実に毎年増えています。女性の応募者が多かった点と、留学先の英国の大学では University of Sussex への留学志望が多かった点が、今年の特色でした。

応募書類のほとんどは、交換留学等学部レベルではなく、大学院以上の研究者レベルで英国の研究・教育機関への留学を志望されている方々ですが、審査の過程で応募書類を読んでみると、日本の教育や大学卒業後の活動の範囲が、確実に国際化しているのを感じます。7割を超える応募者が、高校時代や学部学生時代に、交換留学制度などを通して欧米で教育を受けた経験を持っています。大学卒業後、外国で開発や医療の分野での援助や、教育支援の仕事をされている方々も増えています。また、外国籍の方々に、日本の大学の教育を受けた応募者も、確実に増えています。

すでに英国の大学や大学院で学んで居られる方々の応募も、着実に増えています。これは、昨2017年度の「審査報告」にも書きましたが、英国のいくつかの大学で、他の奨学金の審査に、私共のBCJA英国留学奨学金の授与歴を参考にしていく事実があるからだと思えます。

私共は、今後も、このBCJA英国留学奨学金を、「金額は少なくとも、この奨学金を受けることが非常に名誉だ」と感じられるような、そんな価値のある奨学金に育てて行くつもりです。その意味で、これ迄のBCJA英国留学奨学金授与者同様、今回の優秀な奨学金授与者の方々の今後の活躍にも、大いに期待しています。

今回の審査でも、審査員一同は、非常に優秀な応募者がまだ居るのに、奨学金の資金が足りなくて、奨学金を5名以上差し上げられない現実に直面して、悲しい思いをしました。どうぞ、英国に留学し英国で研究を続けたい若者のために、ぜひ暖かい ご支援をお願い申し上げます。

2018 年度奨学金授与者リスト

氏名	出身校/所属	留学先	分野
井上果歩	東京芸術大学 音楽学部/東京 芸術大学大学院 音楽研究科 博士後期課程	University of Southampton	音楽学
野本和宏	早稲田大学政 治経済学部/J BIC(国際協力 銀行)	University of Cambridge	公共政策
酒嶋恭平	京都府立大学 文学部/京都 大学文学研究 科博士後期課程	University of Edinburgh	西洋史
鎌田彩花	東京工業大学 工学部/東京 大学大学院工 学系研究科修 士	University of Cambridge	化学 (Biological soft matter)
内藤茜	慶應義塾大学 文学部	King's College, London	16 世紀イ ギリス文学

2017 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

BCJA 奨学生生活動報告

齋藤 真

～なるほど留学生の学資は御話しにならないくらい少ない。倫敦ではなおなお少ない。少ないがこの留学費全体を投じて衣食住の方へ廻せば我輩といえども最少しは楽な生活ができるのさ。(中略)然るにあらゆる節儉をしてかようなわびしい住居すまいをしているのはね、一つは自分が日本におった時の自分ではない単に学生であると云う感じが強いのと、二つ目にはせつかく西洋へ来たものだから成る事なら一冊でも余計専門上の書物を買って帰りたい慾があるからさ。～(夏目漱石、『倫敦消息』より)

私は 2015 年 10 月よりオックスフォード大学医学部 (Nuffield Department of Medicine)、Centre for Tropical Medicine and

Global Health の博士課程でマラリアの臨床疫学研究を行っています。このような名誉ある奨学生に選んでいただいたことを誇りに思うとともに、この場をお借りして奨学生選考委員会の皆様、またご支援を頂いております BCJA 会員の皆様に御礼申し上げます。私は選考書類にも記載しましたが、オックスフォード大学より学費の免除及び奨学金 (NDM prize studentship) を得ていましたが、研究でイギリス国外に出なくてはいけない機会が多いこともあり、BCJA 奨学金のおかげで研究により専念できたこと、また、夏目漱石と同様多くのイギリスでしかできない経験を通じて学ぶことができたことを改めて感謝しております。

研究内容

私の研究内容は妊娠中のマラリアの最適な治療についての臨床データの解析 (疫学研究) です。マラリアは約 90 カ国で毎年約 220 万人の患者と、約 45 万人の死者を出しています。毎年 125 万人の妊婦がマラリア感染地域に暮らし、妊娠中はマラリアの感染リスクが上昇するのみならず、母体死亡率も上がり、胎児にも影響があると考えられています。しかしながら、マラリアのような主要な疾患でも、妊婦のようなある種特別な少数集団に対する研究はなかなか進まないのが現状です。我々のグループ (WorldWide Antimalarial Resistance Network) では世界中のデータを集め、これらの特別なしかし顧みられない疾患や対象の研究を行っています。私は妊娠中のマラリアのグループを任せ、最適な治療薬の選択についての研究を行っています。研究結果はこれまで 2017 年以降 3 つの主要な国際学会で発表されました。また、主たる研究結果は今後論文として発表される予定で、次回の WHO のガイドラインに反映されるものと期待されています。妊婦に対するよりよい治療法を追求することは、妊婦のみならず胎児を守ることにつながり、即ち世界の発展を担う次の世代を育むことに寄与する人類全体にとって重要なテーマであると自負しております。

博士課程中にはタイのオックスフォード大学附属マラリア研究所で計約 1 年を過ごしました。臨床的な情報を直に体験することができる貴重な機会でした。在学期間中、計 6 回の国内外学会口頭発表、筆頭研究者としてこれまで 3 本の博士研究に関連した論文と 3 本の非関連論文を発表する機会に恵まれました。感染症を専門とする臨床医の一人として、これらの研究結果が実際の医療、及び、今後の研究の向上に役に立つことを願っています。また、これからも直接患者さんのケアの向上に役に立てるような研究を続けていきたいと思っています。

オックスフォード大学における博士課程

オックスフォードでの博士課程は、一人の独立した科学者 (principal investigator: PI) になるためのトレーニング期間であり、今まで自分が経験してきた「学生」とは少し違うように思われました。特に必修の講義があるわけでもなく、あくまでも主体的に自分の必要とする知識や能力を磨く必要があります。

私の場合は博士課程入学以前にロンドン大学 (London School of Hygiene and Tropical Medicine) の修士課程で疫学・医学統計学を既に体系的に学んでいたため、オックスフォードでは専ら副次的な技能 (論文執筆、プレゼンテーション、学生指導法、研究室のマネジメント等) の講習会に参加する他は、多くの時間はオフィスでスタッフと共に働きながら PI の仕事を学ぶといった形でした。臨床研究は多様な職種の多くの人の協力で成り立っており、自分の研究グループのマネジメントを博士課程中に実地で学ぶことができたことは今後にとって貴重な経験となるだろうと思っています。また、博士課程の学生という立場にも関わらず、オックスフォード大学医学部生の卒業論文の指導教員となる機会を頂きました。昨年度の学生は無事 First-class で終了し、現在もまた別の学生の指導の依頼を頂くことができました。その他、Oxford University Language Centre の日本語ヘルパー、PhD 学生の統計指導、臨床感染症の講義などをする機会を得たこと、また学生への教授法のトレーニングを受けられたことも大変貴重な経験でした。



(写真) St Edmund Hall の Front Quad. 学校規則ではこの芝生はオックスフォードまたはケンブリッジの卒業生しか立ち入ることが許されていない。DPhil を無事卒業した暁にはそっと一歩だけ踏み入れてみようと思っている。

St Edmund Hall の紹介

オックスフォードのメインストリートである High street に面したところに私の所属する St Edmund Hall があります。High street から折れた小径にある、気を付けないと見過ごしてしまうほど小さな正門を抜けると出迎える front quad の佇まいからは、ここがオックスフォード大学のカレッジであることを改めて認識させられます。正式に college となってからはまだ 60 年強ですが、教育の場としてはオックスフォードの 44 のカレッジの中でも古く、12 世紀末にはすでに現在の場所で教育活動が行われていたようです。中でも 17 世紀に建てられた front quad は美しく、四季により別の顔をのぞかせます(写真)。またイギリスの建築物の例に漏れず新旧の調和の取れた融合が各所に見られます。比較的小さなカレッジですが、多くの分野の学部生・大学院生を受け入れており、オックスフォードの中でも美味しいと評判のカレッジディナーでは、哲学専攻の学生と隣合ったりと他分野の話を聞くことができたことも印象に残っています。学部生にとっては芸術やスポーツに力を入れるカレッジとのことで、quad には常に最新の college 対抗戦の結果が記され、学問・生活とともに、イギリスの選ばれし若者たちの人格が共に育まれる現場を垣間見ることができました。

留学生と BCJA

イギリス生活の先達でもあるサッカー選手の吉田麻也選手は先日の国別対抗アジアカップに際して、「この大会に出ることで所属するチームでの立場が危うくなったり、怪我をしたり、そういった様々なリスクを抱えてなお選手たちは参加している。(日本代表に選ばれた誇りをもって)全力で優勝を目指したい」といった趣旨の発言をされていました。私は勝手にそこに留学生に通じるものを感じることを禁じ得ないのでした。夏目漱石の時代から変わらず留学生は、日本から送り出してもらった人も、自分で飛び出してきた人も、多少の差はあれそこに機会損失や留学後の進路等の直接間接のリスクを抱えながらも、なお学びたいという熱意をもって留学に来ているものと思います。このように不安定な状況の中、BCJA 奨学生に選んで頂けたという名誉と、選んで頂いたことから生じる責任は、必ずしも平坦ではない留學生活を生き抜き、博士研究を成し遂げる上で私にとって大きな支えとなりました。

近年では日本からの留学生は一般的に大きく減少傾向にあるとされています。社会情勢や直接的な経済的負担もさる事ながら、リスクを取るという行為に対する日本における社会的評価・支援が見えにくいことも一つの原因ではないかと思っています。リスクを取る挑戦者であり同時に真摯な学問の追求者である留学生を支援する数少ない、そして最も名誉ある組織の一つである BCJA の活動が今後も永く継続し、益々発展されていかれることを心より願っております。

博士課程も残すところわずかですが、再び夏目漱石の約

120 年前の言葉を借りて、この場を締めくくりたいと思います。ご支援ありがとうございました。

～こんな事では道を去る事三千里。まず明日からは心を入れ換えて勉強専門の事。こう決心して寝てしまう。(夏目漱石、『倫敦消息』より)

(2017 年度 BCJA 奨学生 University of Oxford)

2017 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

遠藤彰

研究進捗

現在、長野県松本市のインフルエンザ流行データを利用して、季節性インフルエンザの家庭内・学校内の流行動態の数理的解明を目指して研究を行っている。インフルエンザの流行を引き起こす接触ネットワークは「学校/職場」・「家庭」・「それ以外の一般コミュニティとの接触」の層に分かれた接触によって構成されているとされる。松本市のデータはその中でも特に流行の中核を担っている小学生の 2014/5 シーズンの流行データである。ここには児童の感染のほかに同居家族の罹患の有無の情報が含まれており、この双方の要素を組み合わせることで学校内での感染・家庭内での感染・コミュニティからの感染のそれぞれのリスクを別個に推定することができる。現在は第一段階として家庭内流行に焦点を当てた研究を完成させ、現在論文投稿作業を進めているところである。本論文では具体的には以下のパラメータの推定を行った。

- 1) インフルエンザシーズン中に各属性の個人が家庭外で感染する確率
- 2) 家庭内での感染しやすさ・させやすさを決める接触密度
- 3) 家族の人数が家庭内感染に与える影響の強さ

家庭外感染については子供(児童本人と兄弟姉妹)の感染率が 20% 前後と特に高く、それ以外の大人の感染率は 1~3% 程度と大きな差が認められた。家庭内の感染については、母親と子供との間、および同世代間(兄弟間、父母間)の感染リスクがその他の組み合わせ(世代をまたぐ感染のうち、母親-子供 でないもの)に比べて 2 倍程度高いことがわかった。更に、祖父母間の感染リスクはそれらの高リスクの組み合わせに比べてさらに 2 倍程度高かった。これはおそらく家族の中で日中も含めて最も長い時間を共に過ごす可能性が高いのが祖父母であるためであると考えられ(兄弟・父母は通常日中は異なる場所において接触率は低いと考えられるが、祖父母は共に在宅しているケースが多いと推測さ

れ、他の組み合わせよりも接触率が高くなりうる)、これまでの家庭内流行データでは検討されていなかった新たな知見であると考えている。

入学当初から取り組んでいた上記の研究に加えて、新たに複数の研究プロジェクトが始動している。ひとつは日本のデータと同様の手法を用いてイギリスの中等学校におけるインフルエンザの学校内・家庭内流行に関するデータ収集を行うプロジェクト、もう一方は、インフルエンザワクチンの効果推定に近年広く用いられるようになった研究手法である「Test negative design」に関する診断誤差を修正する統計手法の開発である。前者に関しては、イギリス郊外の学校と協力して生徒から協力者を募り、インフルエンザシーズン中の症状発生についての報告を集めている。1 シーズン分のデータが出そろえば、それを用いて松本市のデータと比較し、流行動態に日本とイギリスの間でどのように類似点および差異があるかを検討することができると考えている。後者は、これまでの研究と違いやや理論寄りの統計手法に重きを置いており、迅速抗原診断など精度が不完全な検査法を使いながらより正確なワクチン効果の推定を行う方法の開発を目指している。特に日本ではインフルエンザの臨床において迅速検査はかなり広く使用されており、これらの精度は低いものの重要な情報を含んでいるデータをうまく活用していくことには大きな効果があると考えている。博士課程開始から1年半が経過し、少しずつ研究の幅が広がってきているのを感じる。せつかくの機会なので自分の本筋のプロジェクトだけに固執せず、いろいろな分野に手を出して研究の幅を広げたいと思う。

生活の状況

あっという間に留学開始から1年半が経過した。フラットは大学から自転車で20分ほど、比較的静かな住宅街を通過して通学できるため交通費節約と運動習慣を兼ねて自転車通学をしている。初年度に買った自転車が購入後3週間で盗難に遭うトラブル(それも自宅玄関の目の前から)などもあったが、2台目購入後は鍵を2個に増やし、今のところはまだ無事である。

食事はできる限り自炊するようにしている。つきあいで外食をすることもあるが、イギリスでは人のサービスに高い値段がつくため普段の生活に外食を組み入れられるほどの贅沢はなかなかできない。一方スーパーで売られている加熱食品は多くが(少なくとも自分の)口には合わず、結果として自分が食べたいものを自分で作るのが最適戦略になる。最初はパンやパスタを主食にしていたが、途中から米食に切り替えた。日本米は日系スーパーで入手できるもののやはりそれなりの価格になるので、代わりにブディング用の米で代用しているが、水加減をうまく調節すればほぼ日本米と同じ味になることが判明して食生活の質は格段に良くなった。とはいえ基本的にはローコスト人間なので料理に凝るというよりはむしろ簡単な料理を大量に作って複数回に分けて消費するような生活が続いている。ただ、こちらで長く住んでいる日本

人のご家庭と知り合いになり時々日本食をおすそ分けしてもらえるようになったので、それも含めると(悪名高い)イギリス在住にしては食の満足度は相対的に高いと言っていいのではないかと。

また食材に関しては相場よりかなり安く(2-3割位安い)買えるスーパーを見つけたので、生活費はかなり抑えた生活ができるようになってきている。買い物もそうだが、全般としてイギリスに住んでみて金銭面に関して思うことは、日本に比べて全体の価格水準は高いものの巧く立ち回れば相当に安く生活することができるということだ。外食の価格の高さと対照的なスーパーでの食料品の安さもその一つだし、例えば交通費に関してもピーク料金を避ける、早めに予約する、学生割引を使うなどによって相当抑えることができる。逆に言えば、そうした安く済ませるオプションを知り使いこなす能力に値段がついているとも言える(悪く言えば思考停止しているとぼつたられるということでもある)。とりあえず今のところはそれなりにうまくやれていると思うが、引き続きいろいろ試してみたいと思う。

研究生活は完全に裁量労働制であると感じる。そもそもPhDの学生だけのオフィスに机があり、他の学生も自由なスケジュールで研究している。結果に対してきちんと責任を取れさえすれば、その結果をどのように出すかは完全に個人の自由といった感じで、自分としては肌に合っていると思う。ただ、のびのびと研究ができるということは油断するとだらけてしまうことと常に表裏一体なので、その間のバランスはきちんと取らなければならないと思う。また研究室での研究だけでなく様々な折に各国で学会や短期コースなどに参加させてもらう機会もあり、単調だけでなく折々にいい刺激を受けられていると感じる。ただし、定期的にそうした海外出張が入ってくる結果、旅行用のエネルギーがそちらで消費されてしまい自分の個人観光目的の“旅行欲”がなかなか溜まりづらいうというジレンマに陥っている。せつかく気軽に色々な国を訪れられる環境にあるので友人が訪欧するタイミングなどに合わせて少しずつ足を伸ばしてはいるが、よりうまく自分のモチベーションコントロールを行いつつもっといろいろなものを見てみたい。

(2017年度 BCJA 奨学生 London School of Hygiene & Tropical Medicine)

2017年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

角南 慎

私は、BCJA 奨学制度によるご支援を頂き、2017年10月からオックスフォード大学物理学科の博士課程に所属しております。

博士課程進学が決まった直後で不安の多かった時期に BCJA 奨学生に選ばれたことは、大変に心の支えになりました。この場をお借りして BCJA の皆様には厚くお礼申し上げます。本レポートでは、オックスフォードでの研究生活について紹介をさせていただきます。

研究紹介

私は、オックスフォード大学物理学科の Atomic and Laser Physics という Sub-department に所属しています。Atomic and Laser Physics という部門は原子とレーザー光の相互作用や、光の量子的状態を扱う部門で、その中でも大きく量子物理とプラズマ物理という 2 つの部門があります。

私は、上記の中でも量子物理のカテゴリに属する極低温量子物体 (Ultracold quantum matter) 研究室に所属しています。極低温量子物体とは、レーザー冷却という手法によって特定の原子を真空中でマイクロケルビンやナノケルビンという絶対零度近くまで冷却しボーズアインシュタイン凝縮という状態に転移させたもののことを言い、原子数万個というマクロな系で量子性を示すことから、量子気体と呼ばれます。ボーズアインシュタイン凝縮は生成に複雑な実験シーケンスが必要ではあるものの、数十秒から数分という長い時間その状態を保つことができる上に、量子的な性質を使ったセンシングや量子シミュレーションと呼ばれる技術としての応用が実現されようとしており、基礎研究の側面と最新技術開発の側面を同時に持つ分野です。

研究生活

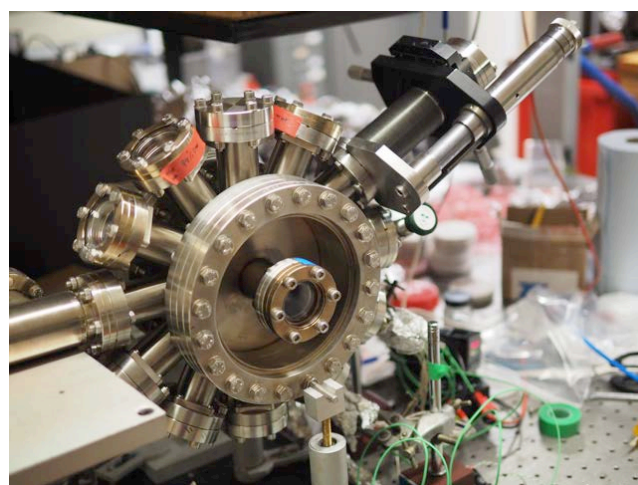
現在、私は博士課程の 2 年目に入り、上級生の実験を手伝いつつ来年自分で行う実験に向けたシミュレーション等を行っています。私が行っている実験には博士課程の学生 3 人とポスドク 1 人が携わっており、頻繁にコーヒープレイクを取るなどしてコミュニケーションを取りながらチームとして実験を動かしています。基本的に上級生がマシンタイムを独占するため、博士論文に載せる実験は来年 1 年で行わなければいけません。

量子気体の実験装置はレーザーや FPGA、シグナル生成等の組み合わせをマイクロ秒以下の精度で 60 秒に渡って制御しないといけない上に、ハードウェアとソフトウェアともにすべて 1 から手作りで組み上げられているため実験装置とプログラムの保守・改良が普段の博士課程の学生の仕事の一つとなっています。具体的には、日々の環境(気温、湿度、周囲の実験室からの電磁ノイズなど)によって変わる実験シーケンスの最適パラメータを探したり、新しい実験を行うために装置やレーザーを追加して制御プログラムとの接続を行うなどしています。装置の立ち上げから論文が出せるようになるまで約 1 億円の資金と数年の時間が掛かるため、不具合を起こせば自分だけでなく後に続く博士課程の学生に影響を与えてしまうこととなり、責任重大です。

オックスフォードでの生活

研究以外では、大学のバドミントン部に顔を出したりハーフマラソンに出場したりと健康にも気をつけながら生活をしています。また、少なからず学部生のティーチングもしており、教育の楽しさも実感し始めています。オックスフォードでは博士課程に所属していてもカレッジを通じて他分野の人と話す機会に恵まれており、アイデアを得たり共同研究のきっかけになることも多いです。私の研究室でも、カレッジの友人を通じて実験パラメータの最適化やそれによる物理的なプロセスの理解について機械学習の専門家とディスカッションを行う機会がありました。

BCJA 奨学金のおかげで、研究に必要な本や買うなど集中できる環境を整える事ができ、有意義な留学生活を送らせていただいております。改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。



(写真) 実験装置の中心となる光学窓のついた真空装置と、実験を操作している様子

(2017 年度 BCJA 奨学生, University of Oxford)

2018年度BCJA会計決算報告書 (2017.11.1～2018.10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△413,949 円
年会費@2,000	210,000 円
合 計	△203,949 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター	51,103 円
発送費	70,758 円
封筒代	949 円
アルバイト	60,000 円
文具	6,787 円
Web更新費	16,848 円
合 計	206,445 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△410,394 円
----------	------------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	650,501 円
寄付金(69名)	796,000 円
合 計 (b)	1,446,501 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000×5人	750,000 円
振込手数料	10,580 円
小計 (c)	760,580 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (b-c)	685,921 円
------------	-----------

2019年度BCJA奨学基金趣意書

2019年1月31日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000年よりBCJA会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、5名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関しては Newsletter にて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail: shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先 : ビーシージェイエー(BCJA)

2018年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2018年10月現在

協賛者総数	69名	総額	796,000円
派遣者数	5名	奨学金総額	750,000円

協賛者氏名（敬称略 順不同）:

阿部宏史	山口幸男	草間芳樹
安達三季生	山口泰夫	太田隆英
安藤鄭之	山口隆美	滝沢英夫
稲永清敏	出来尾格	池浦貞彦
塩田洋	小西文雄	池上忠弘
横山俊夫	小倉暢之	池田修
岡井清士	小鍛冶繁	中山修一
岡村定矩	小池龍太郎	中川威雄
河本直紀	松原健太郎	町並睦生
茅野秀一	信原修	長谷川高宏
関谷透	新井民夫	長澤泰
橋詰浩平	諏訪部仁	田中治彦
玉井俊紀	須田英明	田中晋
金山弥平	水口晶子	土井恒成
溝口節子	水田洋	島津幸男
荒木喬	杉浦和朗	藤本千歳
高井清	菅原基晃	難波光義
高柳和夫	西崎信男	能代誠
佐藤泰介	西田宏子	梅川正美
斎藤文良	青柳昌宏	平健臣
斎藤友博	斉木信二	堀田博
三浦省五	石渡淳一	本吉邦夫
山下純宏	川本敏	野城眞理

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Google グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。これまでの Yahoo グループのメンバーの方は、登録内容を移行しております。登録を希望される方は、Google へ登録後に下記の URL にアクセスして下さい。

<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

または、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までメールでご連絡をお願いいたします。

[編集後記]

青柳会長より後を受けて、27号より編集を担当させていただきました。今年も出版が大幅に遅くなりまして大変申し訳ございません。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくをお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、いつも会計担当の島津様にご協力いただいております。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、2003年度 BCJA 奨学生, London School of Economics, 2003-2004)

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/> では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

Google グループ[bcja]のご利用案内

Google グループ担当